UDLM . SP ver

vol.304　March 31st / 2021

去りし若人の置き手紙

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

今年度春　修了生からの置き手紙

今年 3 月に研究室を旅立つ修了生から、「今、研究室の後輩に伝えたいこと」、「都市工学専攻・都市デザイン研究室での経験が今後の都市に対する立ち位置に与えた影響、その経験を今後どのように活かしていきたいか」というテーマで、メッセージをもらいました。さらにそれぞれが、学部・大学院在籍中に関わった都市を地図上にプロットしてもらいました。写真はオレンジで囲んだ都市における 1 枚です。

應武遥香

小高 PJ でお手伝いしている空き地活用。まちの風景をつくる喜びと他人の人生に干渉する責任を知った。

他者の生活を描くとき

都市とは他者である。都市の理想を描き、発信することは大切だが、それは対話でなければならない。理想が自己満足となり、他者を消費することがあってはならない。しかし臆病になり過ぎてまちに入り込むことができなければむしろ理解を得られない。このバランス感覚が都市という他者の生活に踏み込む人間には必要だ。

言葉にしてしまえば当たり前のことだが、実際に演習や PJ で都市にアプローチするときはかなり苦労した。自分がこのことを初めて自覚したのは学部 4 年のオムニバス演習だった。対象地の浪江に対して自分が何をできるのか、何かを提案したところでそれは自己満足ではないかと不安になった。

ところで、自分が都市工学科を選択したのは「鉄道が地域にとって好ましいものであってほしい」という個人的な理想の実現手段として都市を選んだからだ。今でもこの理想は変わらないし、演習も卒業 / 修士研究もこの理想の実現手段の模索機会として利用した。しかし、自分が都市工で得たものは鉄道にアプローチする手段としての都市ではなく、むしろ都市やそこで生活する他者にアプローチする手段としての鉄道である。個人的な想いと社会的意義の擦り合わせとも言える。これからは鉄道事業者の立場から鉄道にアプローチすることになるが、鉄道運営が目的の組織においても鉄道はあくまでも他者の生活のための手段である。自身の理想と他者の尊重のバランス感覚の重要性に実感を伴って気付くことができたのは、研究室で現地に関わる機会を得たからこそであり、そうした機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げたい。ありがとうございました。

理想高き現実主義者へ

6 年前に東大に入学した際には都市に 4 年半も向き合うとは思っていなかった。それがいろいろとあって、都市工に進学することになったが、それでも最終的には軍隊という部分に自分の大学生活は帰着した。

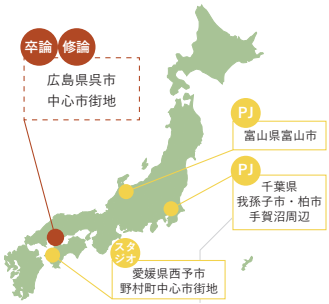
なぜ軍隊に自分が魅力を感じるのか、ということを何年か前に考えることがあった。もちろん単純に格好良いとかそうした理由もあるが、現実主義でなければならないという部分が大きいように思う。（そうでないことも往々にしてあるが）理想論では戦えない。現実を起点に緻密に組み立てる、そんなところに自分の性もあいまって軍隊に引き込まれていった。

都市工で得た最大のものは、そんな現実主義も理想をもたなければ何にもならないという気付きだと思う。「課題解決型」と呼ばれる日本の都市計画のもとで生み出された日本のまちは必ずしもうまく行っているとは言えない。とはいえ、単なる理想を語るのは自分にとって楽しくないし、うまく描くこともできない。そんな現実と理想のはざまで、2 年前に宮城先生から「遠投力」というキーワードをいただき、現実を起点に未来を描いても良いと気づくことができた。

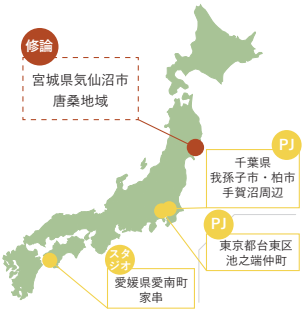
卒論や修論で扱った軍港都市の物語もそうした現実と理想のはざまにあって、現実をその基盤におきながら理想に向かって歩みを止めない人々の営みであったように思う。

遠くにボールを投げるには、まず土台をしっかりさせる必要がある。都市と向き合い始めてまだ 4 年半、まともな土台が組みあがるにはもう少し時間がかかりそうですが、たまにはボールを試し投げしながら社会人として進んでいきたいと思います。

佐鳥蒼太朗



昨年の 8 月の現地調査の際に撮った呉の写真。呉には何度も行ったが、そのたびに違う表情を見られて楽しい。



砂川良太

家串での一枚。漁港前の作業小屋は漁師さんの飲み会部屋でもあり、こうした空間が人と人を近づけると実感。

「都市デザイン」と「復興デザイン」

入学当初、「都市デザイン」とは都市全体をデザインする少し欲張りなものだと思っていました。それに対して、「復興デザイン」とは何をデザインすることだろう？と今一つ想像できていなかったです。この漠然とした問いのもと、私は東日本大震災の漁村復興をテーマとした修士研究に取り組みました。そして、この問いに対する自分なりの答えは、2 年間で深まる部分もあるなか、全体としては発散してしまったようにも思います。修士研究を通して、被災地にこれから暮らす方々の意見を一つの空間デザインとしてまとめることと、その空間を復興のなかで実現していくことは全く違う課題をもっていることがみえてきました。印象的だったのは、行政の方へのヒアリングのなかで、「都市や建築の専門家が入ったことで、住民の復興に対する期待だけ高まってしまった」というお話でした。対象地の多くの復旧・復興工事が完了していませんでしたが、集落の跡地を見たときは、要望図（復興計画にあたるもの）との乖離はたしかに感じました。今思うと、復興デザインがいかに「単純なものではない」ということが分かるまで、冒頭の問いに向き合えたことが私の自信につながっていると思います。「復興」が元よりも良い都市をつくることなら、ここで、手と頭を止めず、これからも地域の方々と現状を整理し、デザインし続けることが必要だと感じています。プロジェクトを通して、この連続するプロセスこそが「都市デザイン」なのではないかと考えるようになりました。なので、これからも対象地と関わり続けることを、この場を借りてみなさんと約束したいと思います。

外から来た私が
ソトに魅了された 2 年間

外部から来た私が一番最初に驚いたのは、周りの「自分の思考を言語化する能力の高さ」です。当然ですが、都市デザインは建築より広い範囲を扱い、多様な利害関係者が発生するため、準じて提案をする際にそれが単なる思いつきや個人の好みではなく、いかに理に適ったものであるかが追求されます。学部時代から数多くの演習やコンペを経験してきた彼らにとって、論理を組み立て言語化するスキルが磨かれてきたんだろうなと感じました。そんな私ですら、約 1 年この環境にいたためか、就活の面接の際に「自分の言葉で表現できている」と評価してもらいました。後輩たちには、この環境にいることに自信を持つとともに、先生方や同期の使うフレーズや表現力に意識を傾け、より一層洗練してもらいたいと思います。

さて、私は今春よりゼネコンに就職します。当初からデベロッパーやゼネコン業界の就職を考えていました。一方で、研究室に在籍した 2 年間で主に触れたのは、いわゆる不動産開発ではなく公共空間活用でした。それは①供給者ではなく利用者目線としてこのテーマに魅力を感じていたこと、② 2019 年のマガジン 4 月号で宮城先生が「ヴォイドから発想して都市を考える」と仰っていたことに大きく起因します。プロジェクトと修論を合わせると、道路・都市公園・河川敷地という 3 つの公共空間の活用を検討できたことには非常に満足しています。言うまでもなく、容積率という飴に釣られて床を積み上げる時代は既に終焉しています。これらの経験は、ゼネコンという業界においても決して無視し得ない領域と考え、自分の中で財産としたいです。

西野一希

M1 の 2 月に研究会メンバーで視察した福岡市の水上公園。従来の”公園らしさ”を覆すシンボリックな様相。

沼田康佑

銭湯に行くのは地元の生活を知るうえで助けになるし、
あついお湯に浸かって無になる時間は最高です。

長く短い都市工生活を終えて

ついに置き手紙を書く順番が回ってきました。しかし、いざ書こう思ってもなかなか筆が進まないことに気づかされます。考えていること、感じてきたことはいろいろあります。ただそれを文章という形でまとめることは非常に難しい。読む・書くという習慣をつけずにここまで来てしまったツケでしょう。

一方で、伝えたいことを文章以外の様々な形で表現する術は、都市工で学んだと胸を張って言えるものです。学部の演習から修士論文に至るまで、都市工生活のあらゆる場面で、多角的な伝え方を考えさせられました。そして考えることが好きでした。

都市は、生活者の集合体だと思います。そしてその生活者の多くは、都市全体を良くするにはどうすればいいか、みたいな鳥の目的視点は持っていないのではないでしょうか。自分も、もし都市工に進学していなかったら都市全体のことなんて考える機会はなかったはずです。都市工学を専攻し都市デザイン研究室で学んだ自分は、本来ならもっと空間のデザインから都市に関わるべきなのかもしれませんが、しばらくは生活者に「こういう視点もありますよ」ということを伝えることに専念したいと思います。

最後に自戒も込めて「今、後輩に伝えたいこと」を書くと、読む・書く習慣もそうですが、締切は大切にしましょう。今、自分は締切を過ぎてこの置き手紙を書いています。もはや毎回ですが、本当に申し訳ありません。ただ、迷惑をかけっぱなしの自分のような人を（たぶん）許し助けてくれるのはこの研究室のよさだと思います。まだ見ぬ後輩も含め、やさしさに溢れたデザ研ライフをお送りください。

何をデザインする人になるか？

「何をデザインする人になるか？」という問いをいつも自問自答している。今の自分が即座に回答できないのは少し悔しいが、都市デザインに関わる人には極めて大切なことだろう。この問いを持てたこと自体が建築学科からデザ研に移って得た大きな気づきの１つかもしれない。

僕は建築も広場も橋も水辺も植物も人も、総じて都市が好きだけれど、全ての形を自分で考えることは出来ない。都市デザインとは、空間の形態や見え方だけでなく、素材やつくり方、出来上がった後の管理や使い方、あらゆる主体の巻き込み方など重要な要素がいくつもオーバーラップすることでより良いものを目指すことではないだろうか。実際にデザ研のプロジェクトで、空間が「動く」瞬間を目の当たりにし、「動かす」ための種を撒いたり、「動いた」後にそのプロセスや方法論を分かりやすく伝えるなど、色々な体験をできたことで、そんなことに気づいたのだろう。

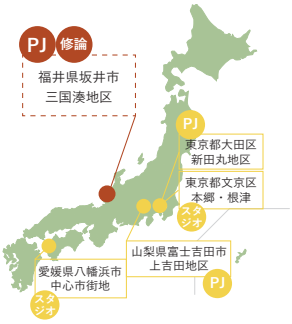
メンバーで構想した空間を使いこなす人々を見つけたり、巻き込むことが出来たことは研究室に入っての成功体験だと思う一方で、自分はどの部分をデザインすることが出来たのだろうかと思うと、自信をもってこれだ！と言えないのが心残りである。

「何をデザインする人になるか？」という問いを自分も考え続けなければいけないわけだが、後輩の皆さんには研究室にいる間にこの問いを心に留めて、プロジェクトや仕事、研究に打ち込んでみて欲しい。最後に中島先生のお言葉を借りると、いつか自分のやってきたことが繋がって行先が見える時が来る、そんな明るい未来を胸に抱き共に頑張りましょう。

松本大知

PJ に参加した２年半前にはあまり見られなかったが、
数年で屋外空間を使いこなす人々が増えた。

宗野みなみ



三国祭の曳き山車巡行前日の様子。各々の家が提灯を
取り付け、お祭りに向けてまち全体がそわそわしています。

確かにあるけれどわかりにくい専門性

自分が立っていたい場所はどこなのか。それがほんのすこしだけ見えて、少なくとも今はここで良さそうだと思えたことが、修士の２年間での大きな収穫です。この２年間は、他分野の人とコラボする機会に恵まれました。まずは建築意匠系の友人とコンペに挑みました。彼らがこの数年で身につけた力を心底尊敬した一方で、それだけではダメだと、視野を広くして新築する建築と既存のまちが相互に与える影響を検証したり、提案内容を利害関係者みなに伝わるよう筋道立てて説明する立場が確実に必要で、それが自分のやりたいことだと強く感じました。次に交通解析を専門とする人たちと展示を企画しました。ここでは、伝えたいことを１つの展示物にまとめる力や、受け手に訴えかけられるよう図式化する力は、誰もが身につけているものではないことに気づきました。また、シミュレーションは過去の傾向から将来を予測するもので、全く新しい空間を提案したときには、それによる人の行動変容を示すことは困難です。都市の空間を使うのが人間である以上、最終的に価値を判断するのは人間であるべきで、その判断をする立場の必要性は揺るがないと強く感じました。都市デザインの専門性は非常にわかりにくいものですが、それを身につける正攻法がないからこそ、稀有なものなのではないでしょうか。これまでに都市を見てきた視点、空間体験、人との関わり等、その人自身の生き様が専門性を構築していると感じます。立ち位置はここで絶対的に正しい、なんて思えることは生きている限りなく、その時、ここでがんばってみようと思った場所でがんばり、また悩んでの繰り返しなのだと思います。ただ、その悩みを理由にその時にいる場所でがんばりきれないのだとしたら、それはただの言い訳になります。そのことを肝に命じて、少しずつ進んでいこうと思います。

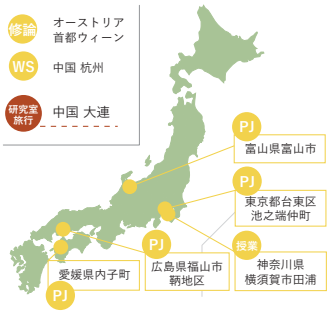
修士生活をふりかえって

修士生活を振り返ると時期によって学んだことも違ったように感じる。一年目はプロジェクトに多く参加したので、昨年度に卒業したOB/OG も多く指摘していた、都市とのリアルな関わりを得る機会が多いというデザ研の特徴を最大限体験することができて、都市を見る基盤を養えたと思う。ただ、プロジェクトが設定する課題の対応にとどまってしまい、自分の独自性を出すまでは至れなかったと反省している。逆に２年目以降はプロジェクトに関わる機会がほとんどなくなってしまったが、その代わりに研究や留学先の活動で「自分」を中心に置くことが主体となる活動が多くなった。修士一年目含めて、いままで受身がちであったので、いかに主体的に自分の立ち位置を確保するかに苦労したことが強く印象に残っている。ここはまだ今後の課題でもあると感じているので、社会に出た後の宿題として取り組んでいきたい。

人は新しい何かと相対したとき、今まで自分が蓄えてきた知識や経験を物差しのように使用して、相対的に判断していくのではないかと考えている。修士生活は全体的に多様な環境に身を置けて、かつ生きた情報に多く触れられたことで、この人生の物差しを養えた時間だったことが財産だったように思う。そう考えると、反省はあれど広くいろいろな取組みに挑戦してみるというアプローチも悪くなかった。

海外留学中に研究室、特に学生とのつながりを維持できなかったのが心残りだが、逆にこのコロナによるオンラインの普及が追い風となって研究室ネットワークが広がっていくのではないかと期待しているので、後輩にはぜひ挑戦していただけると嬉しい。

山口智佳



M1 時の研究室旅行では旧満州に遠征し大連部分の資料と
旅程プラン検討を担当。当時の内容は是非マガジンを！

Miao Siran

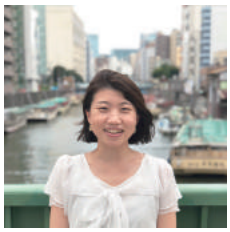
This Picture taken in the summer of 2018 records a traditional ceremony in Fujiyoshida Fire Festival. The belief in Mt. Fuji has been well inherited locally. The grand parade shows the local people's love for traditional culture.

Remolding Self Cognition In Practice

Although I've spent only two and a half years in the Urban Design Laboratory, what I have gained needs to be savored for the rest of my life. The inclusiveness of our lab has created individual diversity. My excellent partners with various skills are able to combine their interests with the practical issues related to the city, so as to get innovative thinking. This motivated me to think and try boldly. I feel honored to be involved in a bunch of interesting activities related to the city. In the Japanese-style Machizukuri practice, the accumulation of small movements can bring substantial results, which brought me a great sense of accomplishment. Besides, in the process of bottom-up urban renewal, I have observed many local people who are enthusiastic about shaping their living space. All these practices have deepened my understanding of the role of urban planner. The Urban Design Laboratory and the entire department provided numerous platforms for us to practice and allowed us to re-recognize ourselves in attempts time after time: our preferences, our roles, and our goals. So I treasure this period of life so much. Finally, I would like to thank the three professors in our laboratory. Their profound erudition and amiability will be engraved in my mind.

今年度秋　修了生からの置き手紙

昨年秋に博士課程を修了された濵田さんと、修士課程を修了された Tatis さんに、研究室に向けたメッセージをいただきました。



濵田愛

都市と人の「物語」を辿って

都市工に入った初日、「観察者」として都市を見ることを知りました。都市を学ぼうと志す以前、私は都市に暮らしながらも、自分の主観のみで都市を捉えていました。しかし、法制度などの客観的枠組みや他者の目線を通して俯瞰的に都市を捉えると、毎日見る都市が全く異なるものに映ったことを記憶しています。研究室では、プロジェクトや研究の対象地をはじめ多くの地域が実際に動く場面に立合い、数多の人々やまちの「物語」を聞く機会を頂きました。この経験が都市を見る視点や感性の素地となり、複雑な都市についての理解を深められたと思います。長く過ごした都市デザイン研究室は、年々メンバーが入れ替り変化しつつも、積層された歴史の中でその「物語」や都市への特有の感性が継承される、一つのまちのような存在だと思っています。後輩の皆さまがどのような「物語」を紡がれるのか、大変楽しみにしております。

修論のご縁で、毎年台東区のお祭りに参加させていただき、別の視点から都市空間やコミュニティを学びました。

Tatiana Tatis

Our Cities are alive

Before coming to Japan my perspective towards the city was somewhat more limited, something like a machine that we need to maintain for its proper functioning but my experience both in Urban Engineering and in the laboratory made me see that the city is more like a living being. It has a personality and it is constantly changing. It is more than streets and buildings, it is culture, it is experiences, it is history, our present and future. It is part of us and we are part of it. I would like to return to my country and share my experience for the public to engage more in urban matters and continue building more humane cities.

This photogtraph left an impression because een when facing adversity people find the way to enjoy life.

編集後記　－編集部座談会

今年度はオンラインでの活動が主だったマガジン編集部。コロナ禍の研究室でマガジンが果たした役割とは。オンライン化の中でマガジンは今後どうあるべきか。2 年間を振り返りながら語り合った。

オンライン化とマガジンの役割、限界

應武　今年一年、フルオンラインでの活動でしたけど、どうでしたか？

宗野　マガジンでイベントを企画して、それについて取り上げることが多かったよね。去年の編集長指名の時に、マガジンでイベント企画したいよねと話していたけど、オンラインで開催だからハードルが下がった。

應武　**研究室活動もオンラインになったことで、マガジンでの企画が研究室内のイベントとして結果的に大事になっていた気がする。**

宗野　博士論文を読む企画は研究的にもよかった。マガジンの企画を皮切りに、自主ゼミみたいに定期開催化するのも面白いかも。

西野　去年も研究室メンバーでラフな研究雑談会をしようという話はあがっていたし、過去にもあったのだと思う。だけど、研究室によっぽど行動力がある人がいてくれないとなかなか実現しないんだなと思う。今年度は図らずともマガジン編集部という肩書き、大義名分によってそのような役割を果たせたんじゃないかなと。

應武　マガジン編集部以外から企画持込があっても良いかも。現状、マガジン編集部が閉じている。研究室全体の中でマガジンが使えるようになればいいな。

西野　一方でミーティングは盛り上がりに欠けたよね。

宗野　**オンラインだと相手のモチベーションとかが見えにくくて、どこまでコメントしていいのか、どこまで求めていいのかがつかめなかった。**オフラインミーティングをもっと早い段階でやっておけばよかった。

應武　一度オフラインでやっておくと、温度感が分かりやすいよね。PJ で実感したけど、その後のオンラインミーティングもやりやすくなった。

掲載号	企画名	概要
vol.294	今、都市の未来を見つめて	with/after コロナ社会を見据えての都市を考えるトークセッション
vol.297	研究お悩み相談ラジオ	研究に関するお悩みを先生方にぶつけるラジオ企画
vol.298	都市デザインの蓄積	博士論文を一人一本読み、発表し合う自主ゼミ
vol.299	変わる私、変わる都市	南千住、京島、月島を巡る散歩企画

▲今年度マガジン編集部が研究室内部で企画したイベント

マガジンの作り方

宗野　ミーティングと言えばマガジンで重視すべきポイントについて。内容については指摘しやすかったけど、**紙面デザインにどこまで求めるか、特に他の人に対してデザインについてどこまで指摘していいのか**、がわからなかった。

應武　各個人のモチベーションが分からないから言いづらいよね。

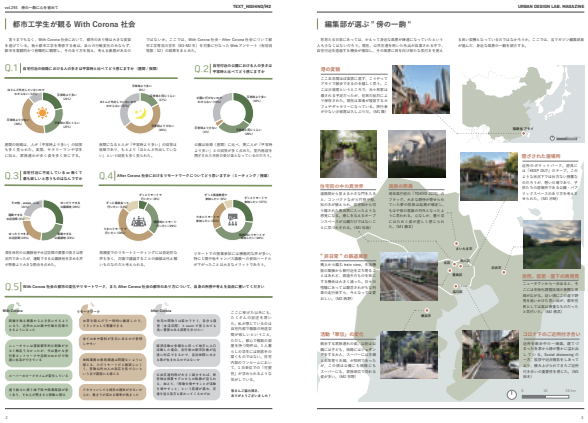
西野　良いのか悪いのか分からないけど、僕は内容よりデザインがモチベーションだった。だから重視したい。
どんなこだわりを持ってどんなツール使った？僕は個人的に 5 月号はデザインに力を入れたし気に入ってるけど、個々のパーツをみると他所のデザインのオマージュ。PJ で作ったブックレットとか、永野先生のデザインとか、ピンタレストとか。

應武　ピンタレストを使うと良いとか、カラーパレットの探し方とか、デザインに関してミーティングの中で情報共有することが大事かも。ミーティングの中で**事例を見ながら、具体的にアドバイス**するのも良いかもね。

宗野　私は内容重視。どこに何を配置して、どんな表現をするかまで考えるのは好きだけど、その後のグラフィックデザインに時間をかけるまでのやる気は出ないかも笑

應武　**少なくとも読みやすさは追及して、編集部の中で指摘し合えたら。**

西野　そうね、余白の取り方とか強弱の付け方とか。



▲紙面デザインにもこだわった vol.293

應武　でも今は紙ではなくて電子媒体で読んでいる人が大半だよね。オンライン化の進行もあって。

宗野　いっそ**電子媒体での読みやすさを追求**して pdf 形式にこだわらずに、web magazine みたいなブログ形式にすると記事をカテゴリーごとに表示して検索しやすくできたり、メリットも大きいよね。

應武　でも紙面を全部廃止するのは少し抵抗があるよね。とりあえずページ制限は撤廃しても良いのかも。

宗野　電子媒体で読むことを想定するようになったからか、**ここ 2 年くらいで内容も外向きになったかな。**特に今年はマガジンで企画したオンラインイベントに建築や土木の学生とか都市に関わる社会人の方とかも参加してくれたし、facebook でマガジンのページを作ったことで先生の知り合いの方にもリーチするようになった。読んでくれる人の範囲が少し広くなったよね。

應武　編集長挨拶でも書いたけど、**マガジンは誰に向けて何を伝える媒体か**をいつも意識していた。マガジンは始まりは社内報みたいな内向きのもので、研究室の他のメンバーが何をやっているのか知ることを目的に始まったけど、去年か今年からは研究室外の人が読んでも面白いものを目指し始めたかな。外向きと言っても「デザ研に関心のある人」程度の外向きかなと思っているけど。

宗野　もっと外向きにすると、例えばある再開発を取りあげて、それに対する評価を書くとかかな。ここまで外向きにする必要はないと思うけどね。

西野　でも宗野が書いた 11 月号の晴海フラッグに対する評論とかは面白かった。**一般的な事例に対してデザ研メンバーが切り込むコーナーはメインでなくとも定期的にあると面白い。**

反省と学んだこと

應武　編集長になってどうすればいいのか分からないまま一年を過ごしてしまった。どうだった？笑

宗野　應武さんの場合はプロジェクトマネージャー的な立場かな。他の人を引っ張っていくというよりはメンバーがやりたいことをやって、スケジュールとかをまとめる感じだった。都市デザイン研究室が個々に重きを置いているから、自然だったよ。可能性として、自分の色を編集部の色として強く打ち出す編集長像もあったかもね。

應武　M1 に対してどう振る舞えばいいのかも分からなかったな。力不足で申し訳ない。

宗野　**最低限主担当と副担当の関係をもっと作れれば良かったね。**内容について議論するとか、企画を一緒にやるとか。

應武　自分達が学んだことはどんなこと？自分は紙面デザインかな。読みやすいレイアウトを作るために、他の人から意見をもらう機会がたくさんあった。

宗野　**マガジンを利用して自分のやりたいことを突き詰めるスタンス**を先輩から学んだ。そういう機会を後輩に作れなかったのは反省かな。

應武　自分の意見をもっと表現できると面白いよね。マガジンは比較的自由に自分の意見を発信できる稀有な場だから利用してほしい。

西野　**担当号のテーマ選びに思想があるといいのかな。**社会に対して斜めから切り込む視点とか、メッセージ性が伝わるもの。

應武　7 月の浦安号は浦安 PJ が節目を迎えるという個人的な理由で作った。去年の 7 月号は副担当だったけど、あれも自分が都市工学専攻のアイデンティティを見失っていたから研究室メンバーに相談しただけ笑　きっかけがないとちょっと聞きづらい疑問を他の人にぶつける機会にマガジンを利用した。
こういうマガジンを利用して自分のやりたいことを突き詰めるスタンスをもっと後輩に伝えられれば良かったな。対談企画、編集後記、コラムを活用するのも手。

西野　ある意味最近これがあったからこういうテーマにしないといけない、みたいな形が固定化され過ぎているのかもしれない。あとは秘めたる思いや主張はあるけど、単純に遠慮と恥ずかしさが障壁となっているとか。

宗野　もっと利用した方がいい。自分のやりたいことをマガジンを利用してやるくらいの気持ちで書いた記事の方が面白い。

應武　他の人も自分から言わないだけで、質問すれば色々出てくると思う。自分の意見を書くだけでなくて、他の人と議論する場にも使ってほしい。
ミーティングの場でも、内容の校正だけでなくて「このときどう思った？」みたいに個人の意見を掘り起こす議論もできたら良かったね。

後輩への期待

應武　**河崎君**はデザインがかっこいい、卒制から引き続き。

宗野　企画・編集・デザイン・期限までに間に合わせる力のバランスが取れている。総合型。

應武　宇治 PJ が始まるに当たって 8 月号では宮城先生にインタビューしていたけど、これは PJ にとっても大切なのでは？個人的な関心の追求にマガジンを使えていた。

西野　マガジンに限らずだけど、自らが手がける作品はこだわり抜き、それを大切にきちんと発信する姿勢は一貫しているのかなと感心した。

應武　**鈴木君**は 1 月号でスタジオについて他の研究室の人とディスカッションしていたのが面白かった。成果物からは見えづらいそれぞれの考えとか、悩みとかをマガジンを使って拾えていたと思う。

宗野　行動力がある。企画して実行するまでのフットワークが軽い。

西野　彼の人柄・責任感があってこそだよね。だから周りも付いてくるんだなと。でもフォーマルな場では優等生になりすぎる側面がある。プライベートで垣間見えるお茶目な一面が滲み出てくると、人間味があってもっと面白い記事になるんじゃないかなと思う。

應武　**藤本君**はまちあるきのフィールド選定に個性を感じた。オフラインの企画は貴重で、楽しかった。

宗野　まちあるき企画は、はじめは学部での設計対象地などを今見たらどう感じるか、それぞれの成長を見てみようというものだったけど、清澄はまちあるき済みと言うことが発覚してから苦労していた印象。藤本君の都市への視点を通したまちの姿みたいなものを見てみたい！マガジンにそれを落とし込んでぜひ発信してほしい。自分ではまちあるき先としてなかなか選ばない場所だったので、発見が多く楽しかったです。

西野　「都市の記録者になりたい」と言っていた時なんと奥深い人間なんだと感じた。来年度の主担当号も個人的に楽しみにしておきたい。
松坂君とは学部が同じ学科だったけど、まずはこうやって編集部に入ってくれたことが素直に嬉しかった。

應武　紙面が校正の中でグッと読みやすくなった印象。読みやすいデザインに持って行くのは今後も頑張ってほしい。

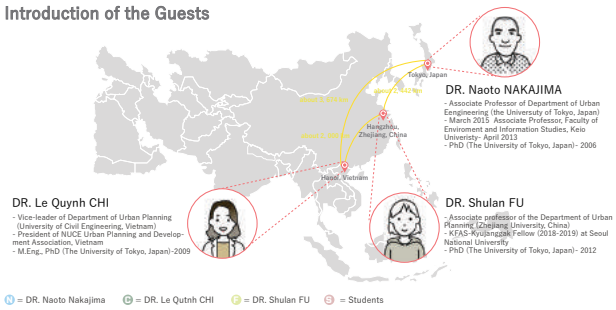
宗野　10 月号の博論企画で同期に対して重めのお願いをしたと思うけど、そこで遠慮せず企画をやり遂げたのはすごいと思った。優秀にまとめている印象なので、自分の本当の興味みたいなものを担当号のテーマにして見てほしいし、そんな記事を読んでみたい！
CHEN さんはまず圧倒的なデザインセンス。そして OBOG を巻き込む行動力と企画力がすごかった。

應武　12 月号で英語版を作ってもらえたのは新たな試み。留学生 OBOG と対談する機会もなかなか無かったので面白い企画だったな。

宗野　自身の疑問が主担当のテーマに反映されていたよね。ミーティングできちんと同期に指摘ができるのも良かった。

西野　中島先生のイラストがつぼだった笑　遊び心をデザインに反映できる人は編集部に中々いなかった。

應武　担当者の色が出た記事を今後も書いていってほしいですね。



▲ここ 2 年間で唯一の英語版である vol.300。かわいらしいイラストも好評だった

編集長の POSTSCRIPT

私の心に残っている記事がある。2019 年 2 月号だ。例年 2 月号では卒業研究・修士研究について先生方にコメントをいただくが、当時 B4 だった私の卒業制作もその一つだった。学生ひとりひとりがこうした形で先生方からフィードバックをいただけることに驚いた記憶がある。この記事が卒業制作に悔いが残っていた自分を奮い立たせ、修士研究でも同じテーマに取り組むことを決意させた。マガジンに力をもらったのである。自分がその年の 4 月にマガジン編集部に入った背景にはこの経験があった。

マガジン制作は研究室メンバーや先生方、研究室外の方のお力添えの上で成り立っている。この場を借りて感謝申し上げます。様々な方々のご協力のもと、私たちが作ってきた記事、企画したイベントは誰かの心に残っただろうか。都市デザイン研究室マガジンが何かを生み出す糧となり、誰かの力になれれば幸いである。そして何より、担当者には楽しんで書いていってほしい。（M2 應武）

URBANDESIGN
LABORATORY